

日本近代文学作品に語られる作家の異国体験——藤村・漱石の場合——

台湾大学 日本語文学科 范淑文

1. はじめに

「グローバル」という言葉が頻繁に使われるようになったのは 1989 年以降のことである¹。このグローバルの発想が世界は一つであるという概念のもとに基づかれていることは言うまでもない。更に突き詰めていけば、国や民族の隔たりを意識しない状況の下で、世界のあらゆる地域、人々、文化などに互いに接する境地であろう。となれば、この概念を、その目指す理想の源流に遡って見れば、自国以外の地域や国に接した際、その接し方や態度、またものの捉え方などからくる困惑によって、生じたものと考えられる。このように捉えると、グローバルやグローバル化は何も現代に限ったことではなく、日本の場合は外国との接触が頻繁になった明治時代には、規模や中味が現在とは異なってはいるものの、既に当時の知識人の間には何らかの形で芽生えていたと考えられよう。

では、グローバル化という概念のもとで近代文学研究に臨む場合、如何なる姿勢を構えるべきか、如何なる研究の可能性があるのか、という問題を意識せずにはいられなくなる。最も基本的な原則は、自国や異国、或は他国などの対立意識を一切捨てなければ、グローバル化した研究に近づくことはできないだろう。本論文では、そうした姿勢のもと、漱石と藤村の作品をグローバル化した視点で読み解くことを試みる。上述したとおり、グローバル化は現代に始まったことではなく、明治時代には既にその兆しを見せていた筈である。したがって、海外体験を題材にした漱石の『満韓ところどころ』と藤村の『エトランゼエ』を、考察の対象とし、海外文化の捉え方や現地人と接する姿勢などを考察し、日本近代知識人の中にあった当時のグローバル化を見出すことを目指すものである。

¹ 「私たちが当たり前に耳にするようになったこの「グローバル」という言葉が、頻繁に使われるようになったのは 1989 年以降のこと。ベルリンの壁が崩壊し、東西の冷戦が終結する世界情勢のなかで、「資本主義・自由経済」対「社会主義・計画経済」といった二項対立が消え、「世界はひとつである」という発想のもと生まれたのが、「グローバル」という概念です。」
http://www.world.ryukoku.ac.jp/department/why_02.html(2014.1127)

2. 『満韓ところどころ』のグローバル性

『満韓ところどころ』は明治 42 年 10 月 21 日から 12 月 30 日(大阪版では、10 月 22 日から 12 月 29 日)まで、総計 51 回にわたって東京・大阪両地方の朝日新聞に連載された。表題から、漱石は執筆当初、訪問した大連や旅順などの「満洲」²地域及び京城(現ソウル)、仁川等の「朝鮮」地域の各海港都市における見聞を紀行文の形式で日本の読者に紹介しようと企てていたと言えよう。だが、伊藤博文の暗殺事件で、事実上は、『満洲ところどころ』にとどまったのである³。のみならず、『満韓ところどころ』第一章冒頭には、「南満鉄道会社つて一体何をするんだいと真面目に聞いたら、満鉄の総裁も少し呆れた顔をして、御前も余つ程馬鹿だなあと云った。是公から馬鹿と云はれたつて怖くも何ともないから黙つてゐた。すると是公が笑ひながら、何だ今度一所に連れてつて遣らうかと云ひ出した。」(『漱石全集 第 12 巻』P227)と、「満洲」へ行く経緯について語られている。『満韓ところどころ』は、言わば旧友である満鉄の総裁中村是公の招待を受け、日本経営となった海外の土地——他所の土地に新たに築き上げられつつある日本社会——の様子を、招待者側の期待に応じ内地の人々に伝えようとする企てである。そうした条件及び伊藤博文の暗殺事件という政治的背景のもとで、語るべきと韜晦すべき点を心構えながら、『満韓ところどころ』の執筆に臨んでいる漱石の憚る姿が想像できよう。ここでは、こうした漱石の憚りで『満韓ところどころ』の行間に隠蔽されている情報をも見出して漱石の真意にアプローチしてみる。

2.1 旧友に囲まれる語り手＝現地の「満洲」人に距離を保つ語り手

『満韓ところどころ』では、招待してくれた満鉄の中村総裁及び、「大連税関長」、「大連海関旬報社長」、「公益公司出張所所長」、旅順の「警視総長」などいずれもこ

²『満韓ところどころ』、荒正人『増補改定 漱石研究年表』1984 集英社などはいずれも「満洲」と記している。

³漱石は第 51 回の末尾に「まだ書く事はあるがもう大晦日だから一先やめる」と記しているその後の朝鮮の部分が途絶してしまったのは、祝日という理由のほかに、伊藤博文の暗殺事件と無関係とは考え難い。『満韓ところどころ』が 4 回連載された後の 10 月 26 日、当時まさに「満洲」を視察中だった伊藤博文が暗殺され、10 月 28 日の東京朝日新聞には犯人として三十歳前後の朝鮮人・安応人(UN,CHI-AN) (『新聞集成編明治年史』1936 年、財政経済学会) の名前が掲載された。のみならず、伊藤が「満洲」視察に出発した 10 月 16 日当日から遭難を経て 11 月 5 日の国葬に至る間、新聞報道は全くこの関係の記事で塗りつぶされていた。このような敏感な時期にあたり、漱石が『満韓ところどころ』を実質的に『満洲ところどころ』として打ち止め、日本と「朝鮮」の敵対感情を再び挑発することを避けようとしたのは無理もないことであつた。

の「満洲」という社会における地位の高い職についている人物の案内の元で、語り手「余」が「満洲」の様々な建設や遺跡などを見物している。総裁の客であるため、その接待役も特に気を使った今回の旅行はまるで「大名旅行」⁴を思わせるものであった。そうした社会的地位の高いキャラクターの現在の様子及び昔の貧乏姿の回想によって、彼等の「満洲」での活躍ぶり、つまり日本政府の「満洲」における奮闘振りが読者にしっかりと伝えることが出来た。ただ招待の身であるため、訪問先が決められ、「満洲人」との接触が限られているのも理解できる。しかし、語り手がそうした日本人たちに囲まれ、その仲間との会合時間？を如何にも楽しんでいるのも事実であろう。そうした懐かしい仲間と囲まれることによって、実際に現地の住民との接触が遮断されてしまったのも事実であろう。こうした点を捉え現地の住民を異民族として距離を置き、異民族の文化として理解しようとする姿勢が見えないと批判されるのも無理もない⁵。

2.2 語り手の不可視的な眼差し

上述した「満洲」経営の宣伝の手法以外に、『満韓ところどころ』に用いられた対極的な描写法も見落としてはならない。

(1) クーリー団は、怒った蜂の巣の様に、急に鳴動し始めた。其鳴動の突然なものには、一寸胆力を奪はれたが、何しろ早晚地面の上へ下りるべき運命を持った身体なんだから、仕舞には何うかして呉れるだらうと思つて、矢つ張り頬杖を突いて河岸の上の混戦を眺めてみた。(中略) 其処へ脊の高い、紺色の夏服を着た立派な紳士が出て来て、懷中から名刺を出して叮嚀に挨拶をされた。それが秘書の沼田さんだつた。(四章) P234、235

⁴江藤淳氏が「総裁」の客」と題した論文の中で、「九年前の英国留学とはこと異り、いずれにせよこれは成功者の旅というべき大名旅行であつた。中村是公が「総裁」になったのが大成功なら、その「総裁」に招かれて満韓を旅する漱石とて成功者でないことはない。大学を辞めて小説記者にはなつたものの、今の漱石は只の小説記者ではなくて「総裁」の客である。いや、今やかれは「東京朝日」一社を超えて、明治文壇を代表する作家の一人にほかならない。」と述べているように、今回の「満洲」「朝鮮」の旅と明治 33 年の英国留学の経験とは、心境的にも待遇的にも大きく異なっており、また、文壇で既に盛名を馳せている状況での漱石の「満洲」の旅行は、「大名旅行」であると、やや皮肉っぽい言い方で称されている。(『漱石とその時代第四部』1995 年 10 月新潮社 P269-285)

⁵呂元明は、『満韓ところどころ』には一句も、日本軍国主義による中国東北への侵略を責める言葉が見られない。また中国や中国の苦しみ悩んでいる人民に対する同情をみるのもむずかしい。(中略) 夏目漱石の満韓紀行は、彼のこの時期の日記を含め、彼の思想の限界を反映しているだけではなく、彼の旅行生活の狭さをも反映している。」⁵と、徹底的に『満韓ところどころ』を批判している。(呂元明「夏目漱石『満韓ところどころ』私見」『近代日本と「偽満州国」』編集代表西田勝 1997.6.30 不二出版 P275、279)

(2) 馬車の大部分も亦鳴動連によつて、御せられてゐる様子である。従つて何れも鳴動流に汚ないもの許であつた。(中略) 佐治さんは、船から河岸へ掛けた橋を渡つて、鳴動の中を突き切つて、わざへ余を其奇麗な馬車の傍迄連れて行つた。(四章) P235、236

(3) ホテルの外にも一切人が住んでゐる様には思はれない。開廊へ出て往来を眺めると、往来は大分広い。(中略) 丸で廢墟だと思ひながら、又室の中に這入ると、寢床には雪の様な敷布が掛つてゐる。床には柔かい絨毯が敷いてある。豊かな安樂椅子が据ゑてある。器物は悉く新式である。一切が整つてゐる。外と内とは全く反対である。(二十二章) (下線引用者、以下同) P278

以上の引用は、クーリーか一般の中国人市民である被統治者⁶、及び「余」が「満洲」で「新氣象」を見せてくれた統治者である日本人、また、その乗り物や住宅に対する描写である。

クーリーや中国人など被統治者の場合は「早晚地面の上へ下りるべき運命を持つた身体」、「汚ないもの許であつた」、その住宅は「丸で廢墟だ」など、いずれも暗くて未来が見えない運命の持主であり、生活につながるものは汚く、廢れているという印象が強い。その反面、「満洲」の建設に携わっている統治者である日本人は「立派な紳士」、「奇麗な馬車」、「室の中に這入ると、寢床には雪の様な敷布が掛つてゐる。床には柔かい絨毯が敷いてある」という描写の通りに、立派に見えるような格好、生活空間やそれにつながるものは全て奇麗で高級感、豪華さが溢れる雰囲気である。統治者と被統治者に対する描写は対極的になされているのは明白であろう。

こうした隠蔽された語り手の眼差しは、奉天の町での、馬車に轢き逃げされた老人への描写が最も印象的なものである。

不思議な事に、黒くなつて集つた支那人はいづれも口も利かずに老人の創を眺めてゐる。動きもしないから至つて静かなものである。猶感じたのは、地面の上に手を後へ突いて、創口をみんなの前に曝してゐる老人の顔に、何等の表情もない事であつた。痛みも刻まれてゐない。苦しみも現れてゐない。と云つて、別に平然ともしてゐない。気が付いたのは、たゞ其眼である。老人は曇よりと地面の上を見てゐた。馬車に引かれたのださうですと案内が云つた。医者はないのかな、

⁶厳密に言えば、1931 年 9 月の「満州事変」(中国では 9.18 事変と称している)に始まり、1932.3 「建国宣言」、清の廢溥儀を傀儡として立てて東北三省を合併し「満州国」としたあたりから、日本の主体性が確立されたと思われがちである。が、日露戦争のポーツマス条約によって東清鉄道南部支線とその鉄道付属地域を經營するため、中国東北支配の触手を伸ばしていた事実から、漱石が中村是公の招きに応じ、「満洲」へ赴いた時点(1909)では「満洲」はほぼ日本統治同質のものと考えてよいだろう。『近代日本と「偽満州国」』(編集代表西田勝 1997. 6.30 不二出版)を参照。

早く呼んでやったら可いだらうにと間接ながら窘なめたら、えゝ今に何うかする
でせうといふ答である。(45 章『漱石全集 第十二巻』P336、337)

馬車に乗っている日本人の都合や時間への気配りからか御者は老人を怪我させた
ことに構っておられず、その場を去ってしまった。馬車に乗っていた日本人が加害者
である暗示を見抜かなければならない。そうした支配的立場にある日本人の行いに不
平不満を抱いているが、批判や関心を示す権利を与えられていないがゆえ、周りで眺
めている「満洲」の民衆達は「口も利かずに老人の創を眺めてゐる」⁷のである。老
人の心境は「曇よりと地面の上をみて」いるという表現に凝縮されている。数多くの
被害者である「満洲」民衆の代表とされる老人は、苦しんでいながら、それを訴える
道も見当たらず、未来が見えない暗闇のなか、その「曇よりと」した目線が「余」の目
には映ったのである。その描写を通して、世間に公開する——読者の目の前に曝す——
というのが作者の真の狙いだったのではないだろうか。

それ以外に、語り手の不可視的な眼差しはまた、製油工場で必死に働いている「ク
ーリー」の描写にも見出すことが出来る。「舌の無い人間の様に黙々として朝から晩
迄、此重い豆の袋を担ぎ続けに担いで、三階へ上つては、又三階を下る」「クーリー」
たちの顔には楽しい表情を見せるどころか、大豆を運んでいる途中、「顔を合わせて
も殆んど口を利いた事がない」ほど、厳しく管理され、「彼等は舌のない人間の様に
黙々として」という描写は最も彼らの心理や境遇を反映していると言えよう。仲間と
の会話はもとより、自分の意見を述べる権利さえ与えられていない、舌を持つてはい
けない、という被統治者の悲しみや辛い運命の暗示として捉えられよう。悲惨な境遇
の描写はさらに続く。三階や四階に登っている途中、うっかりして下の鉄の桶に「落
ちて死ぬことがありますか」と「余」が心配しながら案内の人に聞くと、「案内は平
気な顔をして、まあ滅多に落ちる様な事はありませんねと答へた」。日本本土から見
学に来ている「余」は、「クーリー」の命も尊いものだという心境で質問をしたのが、
「満洲」ではすっかり統治者の姿勢になりきっている案内人は「クーリー」たちを全
く被統治者として扱い、彼等の命をその社会的地位にふさわしく、軽くみている。こ
の「平気な顔をして、まあ滅多に落ちる様な事はありませんね」という言い方は「ク
ーリー」たちの命が如何に粗末化されているか、その存在が尊重されていないかは明

⁷被統治者への漱石の眼差しを見出し、『満韓ところどころ』を高く評価している伊豆利彦氏
は、「中国の民衆は抗議の声すらあげず、権力と金力の横暴をじっと見つめて耐えている。そ
の沈黙、その静かさが無気味である。たしかに、漱石は無言の圧力を感じないではいられな
かったはずである。」と執筆中の漱石の心理状態を語っている。(伊豆利彦「満韓ところどころ」
について—漱石におけるアジアの問題—『近代文学における中国と日本—共同研究・日中文
学関係史—』編者 祖父江 昭二・丸山昇 1986.10.20 汲古書店 P179)

白であろう。

このような描写手法は、もはや「満洲」における日本人の経営振り、成功した「新氣象」を宣伝するという主旨から離れていると思わざるをえない。被統治者の悲惨な運命や圧迫された生活への語り手の眼差しであるのは明かであろう。ただ統治者の成功を誇示した描写に隠蔽されているため、容易には見出せないのである。

3. グローバル的視点より見る『エトランゼエ』

周知のとおり、藤村は妻の死後、家事の手伝いに來た次兄広助の次女こま子と不倫関係を持ち、その不倫がもたらした苦悩から逃れようとして、大正 2（1913）年 4 月にこま子及び子供たちを残してフランスへ渡ったのである⁸。所謂「新生事件」の処理と思われるのである。その後、大正 5（1916）年 4 月に漸く三年の海外生活にピリオドを打ち、帰途に立った藤村は、大正 7（1918）年、5 月 1 日より 10 月 5 日まで『新生』第一部を『朝日新聞』に連載した。その後、フランス滞在期間中の体験を題材にした作品を次々と発表した。『エトランゼエ』は、後の大正 11 年 9 月に春陽堂から出版された。

こうした背景の下で書かれた『エトランゼエ』を論じる際、「新生事件」に結び付けるのは無理ないことであろう。その後、フランス滞在期間中の体験を題材にした作品を次々と発表した。そして、9 年に起稿した『エトランゼエ』が大正 11 年 9 月に春陽堂から出版された。つまり、「新生事件」が公表されたのち、『エトランゼエ』の執筆に取り組んだのである。そのような『エトランゼエ』はどのように読み取れるだろうか、小さな規模のグローバル化を見出すことが可能であろうか、その解題を試みてみる。

3.1 『エトランゼエ』に語られている異国同士の触れ合い

まず、仏蘭西に向かう船上で会った人について、次に語られた一節に注目してみよう。

(A) マルセイユの町まで案内して呉れようといふ一人の仏蘭西人があつた。この人は国を出てから、もう長いこと支那の四川省の方に医者を開業して居るが、七年目とかで郷里のブルタアニュにある年老いた親達を見に帰るといふ。（1 章 P152）

(B) 船中で一人の巴里の紳士を私に紹介して呉れた仏蘭西人といふは、松山君の知らない人であつたが神戸以来ずっと私の同船した客で、最初のうちは私もその人のことを天主教の坊さんか何かかと思つて居た。だん／＼懇意になつて見る

⁸瀬沼茂樹『評伝 島崎藤村』（1981.10.15 筑摩書房）を参照。

と、もう長いこと支那に住む東洋最良の技師と分った。英語を話す二等船客の仏蘭西人の中で私が頼母しく感じたのも、カステル君とその技師との二人だけであつた。(6 章、P157、158)

(C) 色こそ黒いが、これから巴里を見物した上で瑞西と亜米利加とに留学しようといふフィリッピン生まれの二人の青年だ。航海中よく私達の方へ英語で話しかけに来た人達だ。船には亜米利加人の客もあつたのに、二人はその方へ行かないで、反つて私達のやうな東洋の果から来たものゝ側を懐かしがった。(7 章、P160)

いずれも船上で紹介され知り合ったか、出会った外国人である。(A) は長年「支那の四川省」に医者として住んでいた仏蘭西人であり、(B) も「支那に住む東洋最良の」仏蘭西人の技師であり、(C) はヨーロッパに留学する「フィリッピン生まれの二人の青年」たちであつた。日本を離れると様々な日本民族以外の人に会う。ここで挙げている二人のフランス人の経歴や、語り手「のやうな東洋の果から来たものゝ側を懐かしがった」フィリッピン人の種族は意味深い。個人的な外遊であるため、已むを得ず早速慣れていない外国人に接さざるを得ないだろうが、フランス人に案内してもらうことや知り合ったことは外国との交際が苦手な日本人にとっては唐突と思われるだろう。にもかかわらず、敢えて「マルセイユの町まで案内して」もらったり、「私が頼母しく感じた」りするもの、理由がある。片方が八年も「支那の四川」に居住していた開業医であり、片方が「支那に住む東洋最良の技師」という、東洋の文化に馴染み、心が東洋に傾いていると共通している点に理由がある。更に、ヨーロッパに留学するフィリッピン人が「私」に近づいたのも、同じ東洋という親近感を理由として推測できよう。そのフィリッピン人の一人が更に「船で別れを告げる時に、私に手紙の交換を望んだ」ほど「私」に好意的な態度を示した。「私」はどんな心境で接したか、どんな態度を構えていたか、一切語られてはいないが、異国人が近づきながら、ある程度敬遠するほどの異人種の空気が漂っていないのははっきり言えよう。いや、言葉が余り通じない状況では、寧ろ、心が通じる程そのフランス人にも、フィリッピン人にも親近感を「私」は持っていたに違いない。言葉を変えれば、フランス人もフィリッピン人も、日本人である「私」との間では、互いに異人種のハードルを越え、心のコミュニケーションがある程度できたのではなかろうか。異文化を理解しようとする姿

勢はその異人種の間に見えたのであろう⁹。しいて言えば、そのフランス行の船上では、小さい規模のグローバル化が感じられたと見なすことができよう。

3.2 異文化を見詰める『エトランゼエ』の「私」

パリのリュクサンブール公園の近くにあるアパートに「私」は下宿した。そこから三年間の外国生活が展開されたのである。前述したように、姪であるこま子との不倫の苦悩から逃れようとする企てで、藤村はフランスに渡ったのである。その背景でフランス経験を題材にした『エトランゼエ』を、「新生事件」を抜きに読むことはできないだろう¹⁰。

『エトランゼエ』の中では、意識的なのか渡仏の理由については、直接は触れなかったが、「私は八箇月ばかりも眺め暮した自分の部屋の窓へ行つて、両側に並木の続いたポオル・ロワイアルの町を眺めた。古い寺院にしても見たいやうな産科病院の門の上には、三色旗の雨に濡れたのが望まれる。」(45 章、P201) という叙述が「私」の内面を仄めかしているように思える¹¹。なぜなら、フランスへ旅立った時にはこま子は妊娠していなかったが、帰国してからこま子と再び肉体関係を結び、こま子が妊娠したことで、その背徳関係を断ち切るつもりで小説による公開することに踏み切ったのである。『エトランゼエ』の執筆はその後、つまりこま子が妊娠した後のことである。そうすると、パリでの下宿生活を回想している時に、思わずこま子の妊娠という後の事実を重ねて語ったと考えるのも不自然ではなかろう。その産科病院を見詰めながら、自分の過ち、こま子の妊娠を怯えながら、その救いの方を考えていたに違い

⁹ 「藤村は一個のエトランゼエとして、「東洋人」といふ自覚を抱かしめられた。巴里へ来てみてよくシナ人にまちがはれるが、東洋人としてどんな待遇をうけたか。そこから彼は自国におけるシナ人の位置を反省してゐる。」と亀井勝一郎はその東洋人の意味を捉えている。亀井勝一郎「島崎藤村論」『亀井勝一郎全集』第五巻 1974.2.20 (第一刷り 1972.9.20) 講談社 P90

¹⁰ 『エトランゼエ』の中では、意識的に渡仏の理由に一切触れなかったが、二年目に巴里が戦火に巻き込まれている状況に置かれても、藤村は一時田舎に疎開したが、日本へ帰ろうとはしなかった。パリでの下宿生活は決してそれほど快適ではなく、戦乱の町では絶対に安全とは保障できない状態にもかかわらず、敢えて引き上げなかったのは「新生事件」と深い関係があるのは言うまでもない。

¹¹ 瀬沼茂樹は「他に日本人の下宿しているものがあつたので、僅かにエトランゼの不安と好奇心を鎮めることができた。ここで、藤村は、窓から産院を臨みながら、故国から背負ってきた悖徳の心の傷手を、見知らぬ人の間に「身を隠す」ようにして、癒そうとしていた。」とフランス滞在の「私」の内面について「身を隠」し、心の傷手を「癒そうと」すると見做しているが、作品におけるこの産科病院の意義については、それ以上には言及していない。瀬沼茂樹『評伝 島崎藤村』1981.10.15 筑摩書房 P219

ないだろう。「一切のものを忘れようとして遠い旅に来た私のところへもやがて一年近い月日がめぐつて来るやうに成つた。私は自分の国から離れるために斯の知らない土地へ来たのか、自分の国を見つけるために来たのか、その差別もつけかねるやうに思つて来た。」(53 章、P213)と、語られているように、国を飛び立った時は、あまり深く考えなかったが、フランスでの下宿生活の中で、初めてじっくりと自分を内省しているのである。そして、恐らく離れるのが当初の目的であった筈のフランスへの渡航が、一方では、自分の国を離れたからこそ初めて自分の国、或は自分を見つめられたたのであろう。その自分には不倫相手のこま子も勿論含まれている。パリの滞在期間中、「私」はよく小山内君などの画家たちと一緒に画廊へ足を運び、壁画を見に入ったりしていたことから窺がえよう。その壁画はリヨン出身で 19 世紀最大の壁画家であるシャヴァンヌの絵や壁画である¹²。そのうち、「貧しき漁夫」(図 1)と「眠るパリの街を見おろす聖ジュヌヴィエーヴ」(図 2)は最もよく知られている名画であり、「貧しき漁夫」の方は何回も言及されている。これから棄てようとする赤ちゃんに花を添えようとする母親とは対照的に船の中で子供に背を向け立ったままの父親が描かれている。船に茫然と立ちつくしている漁師——前途に暮れているように見える、元気のない父親——の様子から、どうしてあげることも出来ない情ない父親像が浮かび上がって来る。正にその姿では「私」、藤村の身と重なってはなかろうか。また一方の「眠るパリの街を見おろす聖ジュヌヴィエーヴ」は海を眺めている尼さんの絵である。海の向うにいるこま子の姿を「私」が想起してこの尼さんの絵に重ねて眺め、その尼さんの姿をこま子に見たてようという心情があったようにうかがえよう¹³。

¹²例えば、「私は一人の少女の図の掛つた壁の前に行つて立つた。シャヴァンヌの筆だ。同じ人の筆で、かねて複製を見た時から心を引かれた『漁夫』の図がその近くに私を待つて居た。」(18 章、P171)や、「私がそこへ小山内君を誘つたのは、もとよりシャヴァンヌの壁画を見るためであつたが、(中略)私達はあの尼さんの生立ちを描いた幼時の伝説の図から見て廻つた。その廻廊に上ることは私としてはもう初めてでもなかつた。しかし私は見る度に深い静寂な心持を経験した。」(25 章、P178)などである。

¹³松本鶴雄は「ところで後で振り返ると、この戦争は彼の内部に本人も気付かない大きな影響を残した。あるいは異国の非常事態が彼の内面に隠蔽された贖罪感などの何かを解放したのかも知れない。」と、異国での戦争が「私」に与えた意義を語っている。松本鶴雄「デカダンスとルネッサンス——続・『新生』論——松本鶴雄『春回生の世界——島崎藤村の文学』2010.05.10 勉誠出版 P175

帰国後、「私」はこま子と再び肉体関係を持つようになったが、パリの下宿から産科病院を眺めていた時にも、ジャヴァンヌの絵を見詰めている時にも、「私」は内省するとともに、不倫相手であるこま子の身を案じていたと考えられよう。そのように異国の空気に接している際、「私」は自分の内省の媒介として異国文化を捉えていたのであろう。

4. 結び

漱石の『満韓ところどころ』では、旧友との再会を茶化するような描写を通して、海外における日本人の奮闘振りや「新氣象」を宣伝する一方、日本人と「満洲」人のそれぞれの生活の対比的な描写手法や製油所で働いている「クーリー」の仕事ぶりへの注目、また轢き逃げされ、無表情な顔で生々しい傷を皆の前に曝している老人へのクローズアップなどで、異国人——被支配者の人々——への眼差しを示そうとしている。そのような眼差しを注ぐ一方、満韓鉄道の総裁である中村是公など「満洲」の「奮闘者たちには見えない、海外に新たに築き起った日本人社会の一側面を、内地からの「余」または被支配者という他者の眼を通して暴露し、批判しているのである。そのような不可視的な「余」の眼差しはグローバル的な視点からでなければ、容易には見出せないだろう。

一方、藤村の『エトランゼエ』の方では、フランス人もフィリッピン人も、日本人である「私」との間では、互いに社会的偏見を越え、個人的な心のコミュニケーションがある程度できた。異文化を理解しようとする姿勢がこの異人種の間には見えた、しいて言えば、そのフランス行の船上では、小さい規模のグローバル化が感じられたと見なすことができよう。とはいうものの、フランスに着いてからの「私」の姿勢は、パリでの下宿生活は下宿のおかみさん一家以外には他のフランス人との交流が殆ど為されず、また、フランス在住の日本人画家たちとの会合を楽しんだりするだけで、これでは異文化、異国の空気に完全に馴染んだとは言いがたい。しかし、フランスの壁画家シャヴァンヌの絵を見詰めることを通して、彼に共鳴した「私」は、彼の作品に自分の身を重ね、自省し、自己救済の道を見出そうとする姿勢には異国との融合の志が見られると思える。

このように見て来ると、二つの作品に見る語り手には自分自身も明らかに言及しなかった、無意識とも言える異国への眼差しが存在していた。この眼差しは、異なるものへの先入観を超えた一人の人間としての思いやるという国境を超えた眼差しであ

った。これはとりもなおさず現代のグローバルにつながるものと捉えられるのでなかろうか。

テキスト 『漱石全集』全二八巻、1993～1999、岩波書店
『島崎藤村全集 第十巻』、1978.11.30、筑摩書房

参考文献

- 荒正人『増補改定 漱石研究年表』集英社、1984
- 伊豆利彦「満韓ところどころ」について—漱石におけるアジアの問題—『近代文学における中国と日本—共同研究・日中文学関係史—』編者 祖父江 昭二・丸山 昇、1986、汲古書店
- 江藤淳『漱石とその時代 第四部』1995.10、新潮社
- 亀井勝一郎「島崎藤村論」『亀井勝一郎全集』第五巻 1974.2.20（第一刷り 1972.9.20）講談社
- 瀬沼茂樹『評伝 島崎藤村』1981.10.15、筑摩書房
- 西田勝編集『近代日本と「偽満州国」』1997.6.30、不二出版
- 『新聞集成編明治年史』1936 年、財政経済学会
- 松本鶴雄「デカダンスとルネッサンス——続・『新生』論——松本鶴雄『春回生の世界——島崎藤村の文学』2010.05.10、勉誠出版
- 呂元明「夏目漱石『満韓ところどころ』私見」『近代日本と「偽満州国」』編集代表西田勝、不二出版、1997

図 1

図 2

第 9 回国際日本学コンソーシアム「グローバル化と日本学」
日本文学部会 2014 年 12 月 16 日 於：お茶の水女子大学

